



本紙の使命

吾が同窓會報は母校から最初の卒業生を出すと同時に孤々の聲を上げ爾來年々同窓生を増す毎に同じ歩みを運び本號で第十九回目の誕生を迎ふることになつた。

然し第十六號迄は實際は學術報告に附屬し唯僅かに卷末數頁に其の影をとどめて居たのに過ぎなかつたが昨年の代議員會に始めて學術報告と同窓會報と各自名々に獨立することに定められ、會報は茲に初聲を上げて新裝を凝らし本來の面目に生きることが出来るやうになつた、本號は更生後實に第三回目の誕生なのである。

由來、三代目はいろ／＼の意味に於て或る眞劍さを含んで居る場合が多い、亡びる意味に於ては「三號雜誌」と謂ひ或は「賣家と唐様で書く」のも亦三代目である。榮ゆるものも三代中興の祖に偉人が出て礎を磐石の重きに置いたためで遠くは足利、北條近くは徳川三代の裔たる義滿、泰時並に家光に負ふ所が非常に多いのである。

本號も丁度此の興亡浮沈を制する第三代目にあつて居るから大いに責任を感じ卷頭に一言を叙しいさゝか本紙の使命を陳ぶる所以である。

抑も本紙が獨立した主旨は同窓會の活動と密接な關係を有つものであつて少數の會員を擁して居た昔のことはいざ知らず、今日は一千名の會員を有する大家族となつたのであるから從來のやうな事業では徹底を期することも難く兎角不振がちなので此の際大刷新を加え有機的な共同活動をなし大いに爲すあらんとするために其の機關雜誌である本紙の擴張を計つたのであつて單に學術雜誌を權威づけるために附屬物を扱いたのではないのである。

即ち本會といふ有機体をより合理的に運轉活用するために廣く多く本紙を利用するのが目的であるから本紙を廻る人々は本紙を通じ自由率直に其の所懐を開陳する責任があるのである、或は本

支部より會員へ！會員より本、支部へ又は會員より會員へ！と

然り而して此所に本紙のめざす目標を求めて見れば本紙は本會の一大研究室たらしめたい。

本會の事業發展を期するために相互に隔意の無い意見を闘はし大いに本會の歸嚮を討議し進路を研究し本會では會員の意向を察知して時代の進運に伴ふ施設を行ひ暫くも現狀に停めたくないものである。

本紙は本會の一大談話室たらしめたい。

或時は懷舊談に花を咲かせ若い昔日の追憶にふけり又或ひは東西相へだつた兩地の人情風俗を書きつらねて見聞を廣め又或時は蠶糸業に關する時事を談じて意見の交換を行ひかくて和氣霽々の裡に相互の智識を展べたいのである。

本紙は本會の保養地たらしめたい。

社會より虐げられるもの、疲れたもの等は來つて其の抱藏せる鬱憤を會員の前へ素直に訴へるがよい、多數會員の中には又良い智慧の持ち合せもあるであろうし事情によつては其の苦境に同情しあらん限りの努力は吝まないだらう、かくて一人の落伍者もなく相提携して進みたいのである。

要するに本紙は本會の家庭たらしめたいのだ。瑞氣に充ちた國家の家庭たらしめたいのだ。食卓を廻る人々の心から心へ同窓意識といふ御馳走を盛つて共同的な血液を拂つて貰いたいのだ、此の一貫した血液は千名の心臓を柔かくひたして共通な生命のリズムを踊らせる、其所から確固不拔な同窓會が産れ出て一家團欒裡に陶醉することが出来るのである。

然し乍ら何れにしても本紙の使命を知つて之を利用しなくては同窓意識を深めるわけにはいかない、從來の經驗は編輯當事者に残念な結果を教へるのである。

今や本紙は白紙の儘になげ出されて居る吾等は此のからくりの職工となつて提供される材料を待ち望んで居る。與へられたものは悉く之を消化し分類し血液として活用の道をつけるのだ。

冀くは會員各位の御援助御鞭撻によつて本紙の使命を完全に果し得るやう切に御嚮導を請ふ次第である。第十九號の巻頭に愚言を呈して然回（四・七・一〇）